

TEXT

SUSCOM
SUSTAINABILITY COMMUNICATION HUB CO., LTD.

2025 automne

10

ヨーロッパから届く少し良い未来。
かしこく、やさしいサステナブルライフマガジン

サステナブルな世界をつくる
スタートアップとインキュベーター



TEXT 10号
2025年9月3日発行

発行所:
株式会社サステナビリティ コミュニケーション・ハブ TEXT事業部
〒162-0808
東京都新宿区天神町14神楽坂藤井ビル6F
Tél : 03 3513 0830 Fax : 03 5227 6746
編集: SUSCOM 発行: 後藤卓
http://sus-com.net
アートディレクション: ゴトウヒロシ(ハイ制作室)
印刷: 昭栄印刷株式会社
Photos: Mika Inoue
Coordination: Megumi TERAO



新時代を駆け上がる「スタートアップ」する若き企業家たち。
革新的なテクノロジーや、新しいビジネスモデルが
次々と生まれ、世界を変えていく。そんな時代が私たちの目の前で
大きなうねりを起こそうとしています。

ただ、少し、考えてみるべきことがあるのではないのでしょうか。
変える方向が正しいのか、その速度は適切なのか。
私たちは、きちんと考え、見つめ、そのうねりに向き合わなければなりません。
急ぎすぎる時、そこで取り残される人、幸せが省かれる社会は
決して、良い未来とは言えません。誰一人、取り残してはいけません。

大切なのは、社会と手作りを積み重ね、
「少しでも今よりも悪くない社会をつくっていくこと」
(ダーウィン創業者: フィリップ・バール氏)

スタートアップの多様な先進性と、時代を変えるエネルギーは
未来をつくる原動力なのだから、その力を正しく束ねていくが必要です。

昔、時代を変えたあるアーティストの歌の一節があります。

“時代を変えるのは常に青春で、老いた常識よりはるかに強く、
たとえば嵐にのみこまれても、歴史はそれを見逃さないだろう”

たとえ、変えた光が、思い描いたものでなくても、
志は礎になり、やがて次の時代へつなぐ架け橋になるのです。
そのために、光が途切れがちな時代、本当にスタートアップしなければならないのは、
私たち自身かもしれません。
一人ひとりのスタートアップが、世界を良い未来に導くことを信じながら。

2025年9月 TEXT編集部



世界を変える新しいアイデアや技術が、設立されたばかりの小さな企業から生み出される例は、決して珍しくない。新しいビジネスを考え、新たな市場を開拓し、新しい価値を社会に提供することで事業価値を飛躍的に高めるそのような企業は「スタートアップ」と呼ばれ、国や社会や消費者から多くの期待を集めている。
サステナビリティの実現に向けても、スタートアップは大きな存在感を放っている。気候変動の抑制につながる技術、食糧危機の解決に貢献する発見、あるいは人権や文化を守るためのビジネスなど。既存の大企業や老舗企業には難しいことにも積極的にチャレンジできるのが、スタートアップの強みだ。
そんなスタートアップを多く生み出すことで、社会課題解決や経済発展につなげようと世界各国が取り組んでいる。スタートアップが多いのはアメリカだが、欧州やアジアでもユニコーン企業（企業価値10億ドル超の非上場企業）に育成しようと、さまざまな施策が進んでいる。

サステナブルな世界をつくるスタートアップとインキュベーター

その中で成功事例として注目されているのが、フランスのスタートアップ振興政策French Tech（フレンチ・テック）だ。元々は2013年に始動したデジタル技術の育成を目指す政策だったが、デジタル以外の分野でも資金援助やネットワークづくりなどを行い、その結果、2025年までに25社のユニコーン企業を誕生させるという目標を、2019年に前倒しで達成した。
French Techはたくさんプロジェクトに分かれて進行しており、中にはサステナビリティ推進に貢献する事業・技術に関わるスタートアップを選出し優先的に支援するものもある。代表的なのが、グリーンテクノロジー分野のスタートアップを支援する「French Tech Green20」、農業・食料分野に特化した「French Tech Agri20」だ。
新しい視点と発想で社会課題解決に取り組み躍進するスタートアップと、その成長を後押しするインキュベーターを取材した。

Start-ups et incubateurs pour le monde durable



Station Fのフードコート。誰でも入場でき、好きな席で料理や飲み物を楽しむことができる。近隣の住民も利用するため、いつも賑わっている。

世界最大級のインキュベーター

Station F

French Techの象徴であり、官民が連携してスタートアップを育成しようとするフランスの姿勢を具現化しているのが、2017年、パリ13区の再開発エリアに残っていた旧国鉄の鉄道施設を改装してオープンした「Station F（スタシオン・エフ）」だ。著名な起業家・投資家であるXavier Niel（グザビエ・ニール）さんが巨額の私財を投じて完成させた施設で、「世界最大規模のスタートアップキャンパス」と呼ばれている。34,000㎡の敷地内にスタートアップ約1,000社、パートナー企業約30社が拠点を置いているほか、フランス政府のFrench Tech推進チーム「French Tech Mission」が常駐。支援プログラムや資金調達、事業コンサルティングなどの手続きをワンストップで行っている。



Station Fの入口。

パートナー企業とは、スタートアップを支援する取り組みを行う大手企業の中で、フランスの世界企業LVMHやロレアル、トタルエナジーズのほか、MicrosoftやFacebookなどアメリカ系IT企業なども名を連ねている。French Techはグローバル化にも力を入れており、海外スタートアップの誘致も積極的に行っている。現在、その比率は約3割で、中には日本発の企業もある。

日本から欧州へ、アートの力で 障害のイメージを変容する

HERALBONY EUROPE

<https://www.heralbony.jp/>

Station Fから始まる欧州進出

2024年9月、Station Fに新たに日本発の企業が入居した。岩手県盛岡市に本社を置く株式会社ヘラルボニー、その欧州での事業展開を担うHERALBONY EUROPEだ。ヘラルボニーは「異彩を、放て。」をビジョンに掲げ、障害のあるアーティストが描く作品のライセンス事業を展開している。LVMHが主催する「LVMH Innovation Award 2024^{※1}」のファイナリストに選出され、「Employee Experience, Diversity & Inclusion」カテゴリ賞を受賞。この結果に基づきLVMHの企業支援プログラム「La Maison des Startups LVMH^{※2}」に参画しサポートを受けることが決まり、Station Fに初の海外拠点を設置した。

HERALBONY EUROPEのCGO（Chief Growth Officer）を務める小林恵さんにStation Fの印象を聞くと、「とにかく大きい！ 正直、移動は大変です」と笑い、さらに「感度の高い方々には、Station Fに入居している企業だというだけで、一定の信頼をいただけるようです。まず最初に信頼と期待を持って接していただける、これはとてもありがたいことだと感じています」と語った。Station Fという場をどのように活用していくかは、入居企業によって異なる。提供されるプログラムやイベントに参加したり、他のスタートアップの起業家と交流することもできるが、最も大きなアドバンテージはLVMHや海外の大手企業とつながれるという点だろう。普通なら接点を持つことすら難しい企業とも、Station Fに構える支援拠点を通じて比較的容易に商談の機会を得ることができる。

「現在、当社も具体的な社名は言えませんがさまざまなメゾンの担当者と話をしたり、LVMHグループの力

ンファレンスで発表の機会をいただいたりして、こちらでの露出を増やしていています。Station Fの入居期間は平均して3～4年程度です。その間にお借りできる力はお借りして、存分に頼らせていただこうと思っています」と、小林さんは意気込みを聞かせてくれた。

異なる文化・社会、 変わらない作家ファーストの姿勢

Station Fに入居するすぐに、HERALBONY EUROPEはフランスで初めての展示会を実施した。その中で見えた期待と課題について、小林さんは次のように語る。「ヴェルニサージュ^{※3}はとても盛況で、たくさんの方が歓迎してくれて、期待もしてくれているのだと感じました。とても良いスタートを切れたと思います。開催時期がファッションウィークと重なっていたため、有名ブランドの展示会が目白押しで、その中で集客するには工夫が必要でした。いかに知名度や企画の独自性を高めていくかが今後の課題とわかりました」

一方で、ヘラルボニーの理念やストーリーを欧州に広

げていくには、欧州に暮らすアーティストの力を借りるという方法もある。新たな異彩作家の発掘・契約も、HERALBONY EUROPEの重要なミッションだ。小林さんはStation Fに入居する以前から、欧州各国のアーティストたちの元へ足と運んでいる。「こちらの福祉施設や作家の皆さんとの連携は、日本と比べても非常にやりやすいです。先日ベルギーへ出張した際にも、早速、とある福祉施設と契約させていただきましたし、ほかに好感触を得た施設がありました。ただ、私たちが作家を代表して提案していくには、彼らのことを一番よく知っているという責任と誇りが前提となります。ですので、時間やタイミングを見て、極力彼らのところに足を運び、作品の面白さ、彼らの人となりを知ろうと努めています」

欧州と日本では、障害への意識もアートに抱くイメージも同じではない。異なる文化背景や社会構造への理解を深めながら、作家や福祉施設へ適正な利益を還元し、作家一人ひとりの異彩を尊重する。そんな作家ファーストの姿勢こそが、ヘラルボニーの持続可能なブランドづくりを支えている。



ヘラルボニーの創業者である松田崇弥さん・松田文登さんが表紙を飾るForbs誌と、ヘラルボニーという社名の由来となった単語を二人の兄である松田翔太さんが書き記したノート。



2024年9月にパリで行った展示会。

©Yurina NIIHARA

世界トップのブランドの力を借りて、 障害のある作家への目線を変える

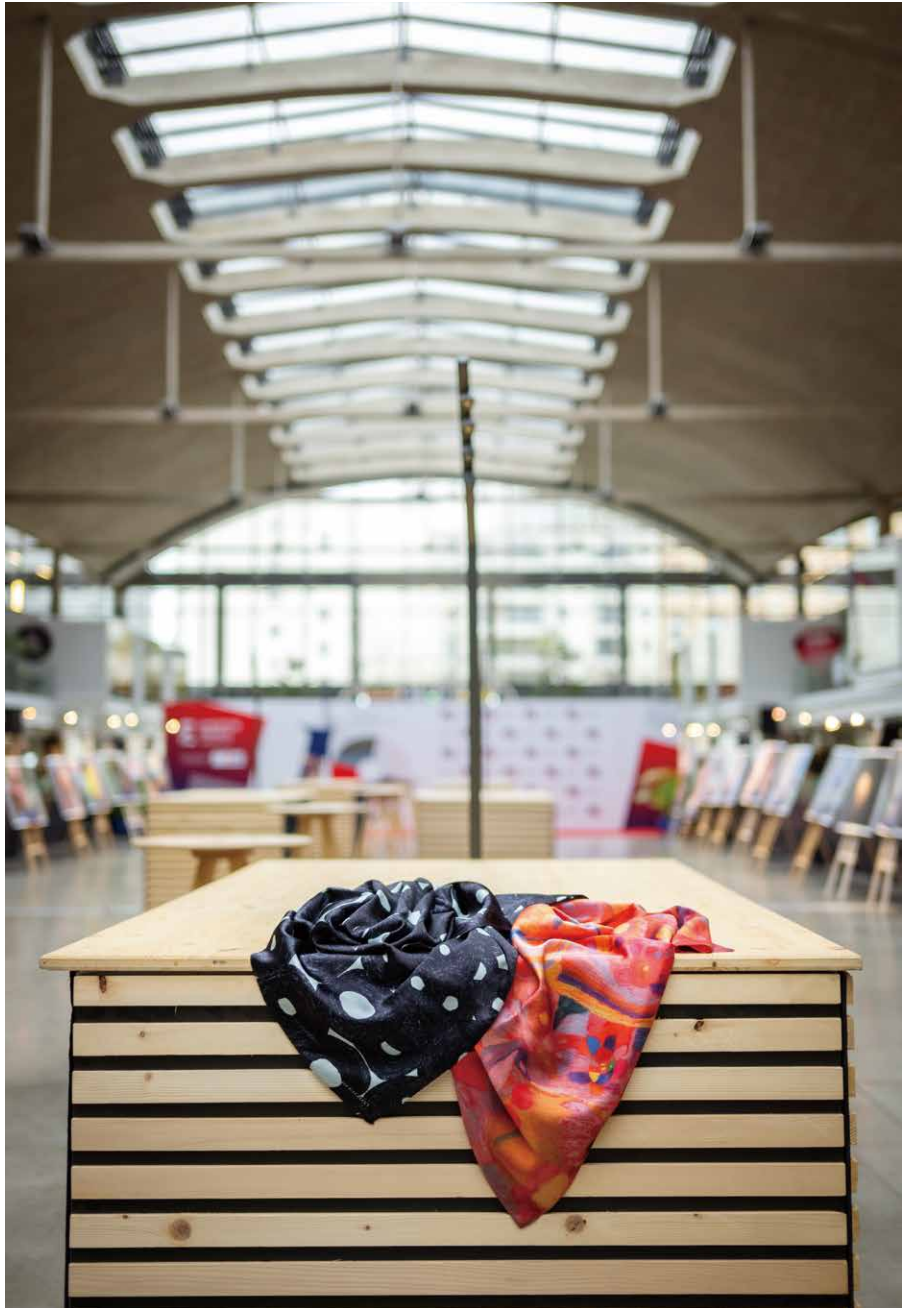
HERALBONY EUROPEの当面の目標は、ラグジュアリーブランドのトップであるLVMHグループの著名なブランドとのコラボレーションを実現し、大々的に発表することだ。これにより、知名度の向上というヘラルボニーの課題だけでなく、障害のあるアーティストを取り囲む環境の課題解決も目指している。

「私たちがラグジュアリーブランドや質の良いもの、クオリティにこだわるのは、障害のある作家のアートやサービスがプロフェッショナルとして見られない、価値を低くつけられがちであるという状況があるからです。これは日本だけでなく、残念ながらフランスを含む世界全体にある現実です」と小林さんは言う。

この現実を塗り替えていくには、誰もが憧れるハイブランドとのコラボレーションや、価値をそのまま届けられる仕組み・手法が重要になる。LVMHとのコラボレーションは、それを叶えるうってつけのチャンスなのだ。

小林さんは、フランスの福祉施設を訪れた際に言われた「報酬としてお金がもらえるというのはもちろんとても大きなことだけど、障害のある人が作家として認められる、社会で認識されるということは、それよりもっと大きいことだ」という言葉を大切にしている。その言葉に応えるべく、HERALBONY EUROPEはフランスをはじめ欧州の社会の中で、列車や航空機のラッピングや切手のデザイン、あるいはグランパレで展示会をするなどのプロジェクトやコラボレーションの実現を目指し、これからも活動を続けていく。

※1 LVMH Innovation Awardは、2017年にLVMHが設立した世界の有望なスタートアップ企業を見出し、さらにその成長を支援するプログラム。第8回目となる2024年は、89カ国、1,545社からエントリーがあった。
※2 メゾン全体のイノベーションを刺激し、ラグジュアリーの未来を形作るため、LVMHが起業家のエコシステムと緊密に連携するためのプログラム。LVMHの傘下メゾンと、ラグジュアリーグッズ業界における可能性を備えたソリューションを提供するスタートアップ企業の協力を促進し、起業家がグループの70の傘下メゾンが形成する独自のエコシステムに特権的にアクセスできるようにする。
※3 展覧会・展示会の開催前夜に関係者やVIPを招待して行われるパーティ。



異彩作家のアート作品を用いたシルクサテンスカーフ。HERALBONY EUROPEのファーストプロダクト。

ボルドーに集まり進化する
 エコロジーとイノベーション

DARWIN

<https://darwin.camp/>

フランスのスタートアップ支援は、首都であるパリだけで行われているわけではない。地方都市においても、フランス政府が主導するやり方とは異なる形で、サステナブルな未来につながるスタートアップ育成が進められている。中でも今、注目されているのが、ボルドー市の新たな観光名所にもなっている複合施設「DARWIN（ダーウィン）」だ。ワインの代表的な産地として知られるボルドー市は、ガロンヌ川の湾曲部に築かれた港町で、左岸に広がる市街地が三日月型だったことから「月の都」とも称された。その市街地の対岸・バスティード地区には、1850年から2004年までフランス陸軍の倉庫が設置されていた。軍が撤退した後、廃墟化していた跡地の再開発計画が持ち上がり、ボルドー出身の実業家Philippe BARRE（フィリップ・バール）さんが現在のDARWINの原型となるプロジェクトを提案。2012年、環境保全や新しいライフスタイルを提唱しようという理念に賛同する組織・企業が集まり、エコロジーとイノベーションを軸にレストランや店舗、コワーキングスペース、高等学校、病院、スケートパーク等を併設する複合施設がオープンした。

レストランからコワーキングスペースまで
 自由な挑戦をサポートするインキュベーター

スタートアップのインキュベーターであるという共通点から、DARWINはStation Fと比較されることが多い。DARWINの営業責任者であるClaire CIBOIS（クレール・シボフ）さんは、両者の違いを次のように説明してくれた。「最大の違いはDARWINが独立した組織であり、この土地を所有しているという点です。Station F以外のイ



DARWINの入口正面に設けられたオブジェ。

ンキュベーション施設も行政が関わっている場合が多く、手厚い補助が受けられる反面、どうしても活動に制限がかかるのです。その点、DARWINはあくまで民間の施設なので自分たちの考え・理想に基づき自由に動いてプロジェクトを進めていけますし、新たな課題があればパートナーや協力企業とともに改革していけます。資金繰りは大変ですけどね」
 DARWINの主な収入源はコワーキングスペース、レストラン、店舗の賃料だというクレールさんの言葉通り、かつて軍の備品を収納していた倉庫の間を抜けるメインストリートを歩いていると、多くのレストランや店舗を目にする。その中で、最も広いスペースを使っているのがピオ（オーガニック）レストランだ。ピオレストランとしてはフランス国内最大級の350席。95％の食材がピオで、75％の食材を近隣地域から仕入れている。また、ショコ



スケートパーク。年間60€で利用できる。



ショコラティエの店頭ではカカオ豆の焙煎を行っている。豆はさまざまな国・地域から仕入れているが、どれもBean to Barにこだわっている。



イベントスペース。映画祭などさまざまなイベントを開催している。

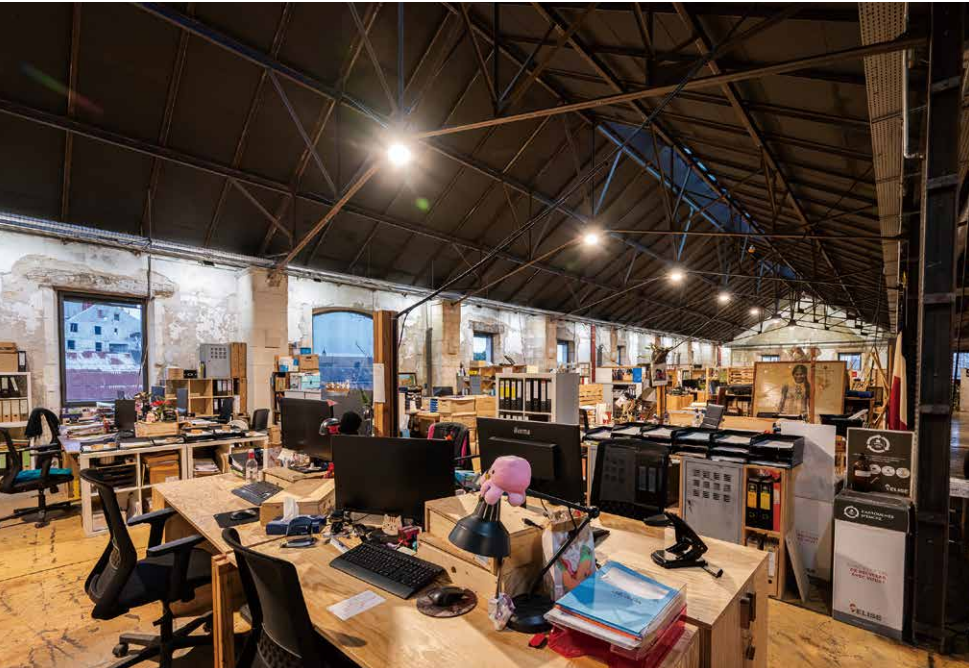


コワーキングスペースの中にある、打ち合わせ・会議用のスペース。子どもが遊ぶおもちゃと設備のように見えるが、中に入ると意外と静かで仕事に集中できる。

ラティエやブーランジェリーでも同様にピオやトレーサビリティの確保された原材料を使用している。食料品以外にもファッションや家具に関する店舗が並び、サステナブルスニーカーブランドVEJAはリペア工房をはじめ修理とリサイクルを中心とするプロジェクトストアを運営している。さらに歩き回ると、病院やイベントスペース、スケートパーク、農場もあった。一見、前衛的なアートスペースのように見える一角に行き当たると、そこはなんと私立の高等学校だという。その奥の小さなアパートに見える建物群は難民保護施設だそうだ。DARWINには一つの小さな村か町のように多様な機能・役割があり、それを運営し利用する組織と人々が集まっている。ところが、コワーキングスペースだけはどれだけ歩き回っても、どこにあるのかわからなかった。クレールさんに尋ねると、倉庫の一つに足を踏み入れ、知らなければ見過ごしてしまう地味な扉を指差し、「ここから入るのよ」と教えてくれた。セキュリティカードで開いた扉の先の階段を登ると、階下の少しダウンナーで落ち着いた雰囲気のカフェやショップとは全く異なる、明るく広大なオフィスエリアが広がっていた。
 DARWINのコワーキングスペースには、現在、IT企業、クリエイティブ分野の企業、非営利団体など120社が入居し、680人ほどが働いている。ナチュラルな色合いの木材を多用した柔らかな雰囲気のオフィスに、倉庫跡地の無機質さは感じられないが、仕切りを設けない広く開放的な空間にはその名残がある。
 DARWINのコワーキングスペースには、現在、IT企業、クリエイティブ分野の企業、非営利団体など120社が入居し、680人ほどが働いている。ナチュラルな色合いの木材を多用した柔らかな雰囲気のオフィスに、倉庫跡地の無機質さは感じられないが、仕切りを設けない広く開放的な空間にはその名残がある。
 エコロジーとイノベーションというDARWINの理念に賛同する企業であれば入居でき、入居期間の制限はない。



DARWINの敷地内で運営しているエドガー・モラン高等学校。独自の教育システムで生徒それぞれの能力を伸ばすことを目指している。



元倉庫の2階に設けられたコワーキングスペース。全部で約8,000㎡の広さがある。

中には、2012年の創設当初から利用している企業もあるという。「起業したばかりのスタートアップ企業には、一定期間、賃料を割引するなどの支援を実施しています。また、数名の支援専属スタッフがいるので、困ったことがあれば彼らに相談することもできます」と、クレールさん。垣根のないスペースに気軽に声をかけられるサポーターがいてくれる環境は、走り始めたばかりのスタートアップにとって何よりも心強いだろう。

世界から注目され、地域住民が憩う場所

DARWINは今やボルドー市の主要観光地に挙げられており、世界中から人が訪れる場所になったが、同時に、地域の人々が日常的に集まり交流する場所でもある。ワーキングスペースとして利用する社会人、仲間と課題に取り組む大学生、くつろげるカフェとして利用する人、オーガニックフードを購入するために訪れる人、スケートパークで技を磨く人など、DARWINを利用する地域住民は年齢も属性もさまざまだ。午後は回り学校の授業が終わる時間になると、小さな子どもたちの姿も増えて

くる。ゲーム大会や絵本の読み聞かせといった子ども向けイベントも定期的に開催しているので、夕飯までのひと時を過ごすのにぴったりなのだ。
 なぜ、これほど多様な人がDARWINに集まるのか。その理由の一つとして、創業者のフィリップさんはDARWINのそもそもの成り立ち、根底にある考え方を聞かせてくれた。
 「DARWINは一つの思想に縛られるのではなく、いろいろな考え方の良いところをミックスしてより良いものをつくることを目指しています。マルクス主義やキャピタリスト、アナーキズム等、相反する思想の良いところだけを抜き出して生かす。日本には『機能美』『用の美』という価値観がありますね。そのイメージを私は持っています。他人の自由を邪魔せず、自分たちの自由を守り、助け合って持続可能な社会をつくっていくのが私たちの目標です」
 DARWINは多くの考え方を受け入れ、機能を重視しながら自由にそれぞれの目標に向かって進んでいく。国の政策に縛られない、民間施設らしい強く柔軟なあり方で、スタートアップと持続可能な社会づくりを支援していく姿勢とシステムが、多くの人を惹きつけるのかもしれない。

大切なのは、一步一步、社会のための“ブリコラージュ（手作り）”を積み重ねていくこと。
せめて、明日が今日より少しでも悪くない日であってほしいと、ただそれだけを願って

私がDARWINを立ち上げたきっかけというのでしょうか。一つの起点となっているのが、15歳の時に地元の使われなくなったアイススケート場をスケートパークにしたいと考え、市役所に計画を持ちかけ、却下されたことです。社会のためにあるべきことが実現されないシステムに漠然と感じたフラストレーションが心に残り続け、DARWINのエコシステムにつながっていったのだと思います。その後、1995年にWebマーケティングの会社を友人と立ち上げたのですが、2000年頃に広がった「デジタル金融化」の影響で、データの私有化による不平等やデータ盗難など社会問題が起こるようになり、自分の仕事が社会に対して良いアプローチになっていないことに気付かされます。私はデジタルマーケティングの世界から離れ、社会を良くしていく、サステナブルな方向へ向かうための仕事をすると決意し、「少ないもので多くを成す」「少ないものでより良いものをつくる」という信念のもと、2005年にDARWINを立ち上げました。

DARWINは、協働と
“質素さ(ムダを省いた生き方)”を基盤としたエコシステム

私たちのビジョンを実現するには、市場経済の中でも自由に発想し、自立して行動できる組織でなければなりません。その点、DARWINは複数の企業や団体、協会とともに共同で動いているエコシステムであり、私たちは、冗談まじりに「資本主義的アナーキ・マルクス主義モデル (capitalisto-anarcho-marxiste)」と呼んでいます。資本主義 (capitaliste)、アナーキズム (anarchiste)、マルクス主義 (marxiste)を融合したようなモデルで、マルクスの社会思想からは「富の再分配」という理念を、アナーキズムからは「自由と自治」「上下関係のないガバナンス」を、そして資本主義からは市場経済の枠組みと実行力を取り入れています。イデオロギーにこだわる人たちからは理解されづらいところがありますが、いわば、私たちは「政治的DIY=政治的な“手作り”」をしているようなものです。このエコシステムの継続には、自由で独立した協働による「自立した運営」が必要であり、ある程度の利益が求められます。利益が目的ではありませんが、一定の利益を上げなければ、この場を維持し、再分配することもできません。毎年、売上高の約5%がDARWINの社会的エコシステムに還元されます。そのお金は、たとえば学校、スポーツ施設、緊急シェルター、そしてセネガルやアマゾン、フィリピンとの国際的な協働プロジェクトに使われるのです。私たちは市場経済の中で「資本」ではなく「循環」を重視しているのです。

ブリコラージュ(手作り)の積み重ねから生まれる
「人の暮らしに寄り添った美しさ」

DARWINのプロジェクトはある意味で「手作り=ブリコラージュ」の仕事の積み重ねとも言えるものです。私たちは「アカデミックな理論」ではなく、実際にできることを手作りで積み重ねています。現場主義で、実用的で、実践的な考え方。「今、目の前にある課題に最善を尽くす」というやり方です。たとえば、エンジニアリングによる計画は完璧に設計されているけれども、人間的な柔軟性がなく、現場からかけ離れていることも多い。それに対して、ブリコラージュは人間の暮らしに近いと言えるのではないのでしょうか。このアプローチの原点は、日本文化にあります。それは「用の美=美しさと機能性の両立」という文化であり「美は使われる中にある」という考え方です。美しいものは実用的であり、実用的なものも美しくあるべき。道具一つとっても、飾っておけるようにデザインされている。あるいは、階段や梯子をわざと隠さず、空間に美しさとして成立させる。私はそれを日本で見て、大きな影響を受けました。有名なイサム・ノグチのツクールはまさにその象徴だと思います。機能と美が一体化した哲学。そうした繊細で思慮深い美学が、日本の生活文化に根づいているんです。



DARWIN (ダーウィン) 創設者 ©Mikael Vojinovic

Philippe BARRE (フィリップ・バール)

バンザイとアリガトウ。文化をつなぐプロジェクト

このような考え方は、新しいプロジェクト「Banzaï Darwin (バンザイ・ダーウィン)」にもつながっています。「バンザイ」はフランスやアメリカはもちろん、日本でも「戦争のかげ声」と誤解されがちですが、もともとは「長寿」や「10,000年の繁栄」を意味する美しい言葉です。自然への尊敬と感謝を原点とする本プロジェクトに相応しいのではないのでしょうか。具体的には森林と海岸のレジリエンス (回復力) を高めるための自然再生プログラムで、アルカション湾のあたりに取得した50ヘクタール以上の土地を自然保護の拠点に、森林や海洋の保護、再生のための情報発信・教育・研究拠点として活用しています。もう一つはアンギュレームで展開しているプロジェクト「Alligator (アリガートル)」です。アンギュレームといえば、バンドデシネ (漫画) の町。すなわち、このプロジェクトは、漫画文化と都市文化を融合させた取り組みでなのです。Alligatorという名前は「アリガとう」と「アリゲーター (ワニ)」をかけたダブルミーニング。IDSNCF (フランス国鉄) の貨物駅を改装した施設で、そこに日本の漫画家や韓国、台湾の作家たちを毎年迎え、国際漫画フェスティバルとも連携するなど、1年を通じて都市文化の発信地として運営しています。テーマは漫画だけでなく、スケート、ヒップホップ、グラフィティなどのアーバンカルチャーとの融合まで広がっています。日本の漫画は1970年代に黄金期を迎え、同時期にニューヨークではヒップホップやグラフィティ、ロサンゼルスではスケートボード文化が誕生しました。つまり、全く違う場所で生まれた3つの都市文化が、1970年代に同時多発的に広がっていったのです。私自身、1970年代に生まれ、80年代にティーンエイジャーになった世代なので、この3つの文化と共に育ってきたのですが、これは作家エドゥアール・グリッサンが提唱した概念、文化の交差=「クレオリゼーション (混成文化)」、異なる文化が交わり新たな表現を生む現象です。つまり、あらゆる文化的要素をブリコラージュ (組み合わせ・手作り) して、新たなものを創り出す空間を目指しているのです。私たちが目指しているのは、昨日よりも今日、今日よりも明日。少しでも“今よりも悪くない”社会をつくっていくこと。完璧を目指すのではなく、悪化させないように“少しでも良い状態を維持していく”。今の文明は、社会の不平等や資源の枯渇という点で限界に来ています。だからこそ、持続可能なやり方を模索する必要があります。これはイデオロギーではなく、実践の問題なのです。だから私たちは「アカデミックな理論」ではなく、「今日、何ができるか」を大切に活動を続けていきます。

スタートアップからグローバル企業へ
次世代へつなぐ挑戦のバトン

BUREAUX & CO
https://bureauxandco.fr/

事業成長を後押しした時代の変化と
French Tech

French Techの支援を受け、事業拡大に成功した企業は多い。その一つ、フランスを中心に欧州各地でコワーキングスペースを運営するBUREAUX & COは、2017年からFrench Techに参加した。CEOのNordine El OUACHMI (ノルディン・エル・オアシュミ) さんは当時を振り返りながら、この数年で人々の働き方が大きく変化したことを教えてくれた。
「BUREAUX & COは、1,000㎡のオフィスから始めた企業です。当時はまだコワーキングシステムは一般的ではありませんでしたが、アメリカのサンフランシスコではすでに広がっていて、私はフランスでも伸びるだろうと考えていました。なぜなら、フランスの90%の企業は従業員10人以下の中小企業ですが、その事業規模に合った小さな事務所物件は少ないという問題があるのを知っていたからです。ただ、需要はあっても事業をうまく成長させていくのは簡単ではなく、French Techの支援やネットワークのおかげで成長を加速できたのは確かです」
BUREAUX & COは現在、5万㎡のオフィススペースを運営し、コワーキング事業者としてフランス国内で第6位の事業規模となっている。スペインにも拠点を設けており、今後、欧州各地でさらなる事業拡大を目指す。

スタートアップが
地域の課題解決に取り組む

ノルディンさんはFrench Techを活用して事業を拡大してきた経験を、次の世代のスタートアップへと伝えるため、2023年1月から2024年6月までFrench Tech Méditerranée※の代表を務めた (現在もメンバーとして在籍)。支援される側からする側へ、BUREAUX & COのCEOという肩書きはそのままに活動の幅を大きく広げた形だ。
「私がFrench Tech Méditerranéeの代表になったのは、これまでに受けた支援の恩返しをしたいという思いがあるからです。創業当初、私は事業拡大の方法として伝統的なアプローチしか知りませんでした。しかしFrench Techに参加することで、多様なネットワークに触れることができ、企業の発展や市場の新しいトレンドにも適応できるようになったのです。スタートアップの中には支援の枠組みから取り残されていると感じている企



パリ市郊外にあるBUREAUX & COのコワーキングスペース。滑り台やピアノなどが設置された遊び心のある内装が特徴的。



業もあるので、そのような企業の経営者たちに私の経験を共有し、支援を提供することで、French Techをさらに包括的で活気あるエコシステムへと進化させていきたいです」
French Tech Méditerranéeは、地中海地域のイノベーション・エコシステムの中心的存在だ。French Techはフランス政府が主導する政策であり組織だが、その下に地域ごとの組織を設けることで、それぞれの地域課題に柔軟に取り組めるシステムとなっている。たとえばパリでは都市・交通に関する課題が重視されるところを、Méditerranéeであれば水に関連する課題を重視し、その解決のためのプログラムを多数進めている。ノルディンさんはFrench Tech Méditerranéeの代表を務める中で、たくさんの優れたIT・テクノロジー関連業界の関係者と協力し合い、意義あるプロジェクトを推進する機会を得たと語る。同時にFrench Techが経済や社会に与える前向きな影響を目の当たりにし、技術とイノベーションが社会・経済を成長させる大きな原動力

であることを改めて確信したという。
社会課題の解決と経済発展を目指すスタートアップ支援は、確かな成果を結びながら次の世代・新たなステージへと進み始めている。

※French Tech Méditerranéeは、地中海に面するガール県とエロー県を管轄するFrench Techの地域ハブ。管轄地域内のスタートアップ企業、資金調達関係者、機関、コミュニティ、そしてパートナー間の連携を促進している。



BUREAUX & COのCEOで、French Tech Méditerranéeの代表も務めたNordine El OUACHMIさん。モンペリエ出身。

精密発酵でつくる未来の乳製品

Verley

<https://verley-food.com>

環境課題と食糧危機を同時に解決できる技術

最先端の科学技術を用いて社会課題の解決を目指すスタートアップは多い。中でも食糧危機は世界的かつ喫緊の課題であり、さまざまな国・地域で対策が進められているが、残念ながら抜本的な解決策はまだ見えていない。そんな中で実用化が期待されるのが、精密発酵技術だ。精密発酵とは、特定の遺伝子を挿入した微生物を利用した発酵により、タンパク質や脂質などの食品成分を生成するもの、単純に言えば、牛がいなくても乳製品をつくれる技術だ。食糧危機や環境問題への新たな解決策として期待されており、現在、各国で規制の見直しや市場形成など一般販売する食品に活用するための準備が進められている。近年、畜産業の環境負荷、いわゆる「牛のゲップ」問題※が気候変動の一因であると騒がれているが、同時に、夏の異常な暑さ等の影響で乳牛一頭あたりの生産量が減



VerleyのCEO、Stéphane Mac Millanさん。フランス海軍で勤務した後、Foodora（オンラインでの食事デリバリーサービス）、McKinse（コンサルティング会社）などを経て、Bon vivant（現、Verley）を立ち上げた。



Verleyが製造したプロテインを用いてつくる製品のイメージ。乳製品をはじめ幅広い分野で使用されると想定している。

少ずるといった問題も発生し、事実、フランスの牛乳生産量は減少傾向にある。しかし、ヨーグルトやアイスクリームといった乳製品の需要は増している。また、糖尿病治療に欠かせないインスリンは乳タンパク質を原料とするプロテインからつくられるなど、医療の面からも牛乳の生産量が減るのは大きな問題だ。これらの解決策となり得るという精密発酵を利用してプロテイン生産を行うバイオテクノロジー企業VerleyのCEOであるStéphane Mac Millan（ステファン・マック＝ミラン）さんは、初めて精密発酵に出会った時の感動を次のように語ってくれた。「環境への影響も少なく、すばらしい技術だと思いました。ところが、私が初めて精密発酵を知った当時、フランスどころか他の欧州諸国でも精密発酵プロテインを製造している企業はありませんでした。世界の乳製品大手企業15社のうち9社が欧州、そのうち4社がフランスの企業であるにもかかわらずです。乳製品はフランスの食文化においてとても重要なもの、この先精密発酵プロテインが主流になった時、ではフランスではどこでつくるのかと考えと、自分がやるしかないと思いました」

市場開放を見据え、大量生産に備える

精密発酵プロテインは、アメリカ、イスラエル、オランダ、フランス、イギリスの5カ国で製造されている。特に進んでいるのがアメリカとイスラエルだ。ステファンさんが精密発酵に出会ったのもアメリカだった。「2022年にこの事業を立ち上げた時、スタートアップ企業としてフランス政府からの援助を受けました。French TechをはじめBPIフランスや、フレンチデジタルなどさまざまな支援の枠組みを利用させてもらっています。資金はもとより、この枠組みを使うことで世界規模の大企業や専



精密発酵技術で製造したプロテイン。

門機関とのコンタクトがすぐに取れるという点が、大きなメリットでした。おかげで、先行するアメリカの主要企業とも連絡を取ることができたのです」と、ステファンさん。現在、Verleyの精密発酵プロテインは、まだ製品化できていない。食品関係の製造・販売の許可を得るため、検査機関での調査・分析を行っているためだ。「まずは原料供給業者として、B2B（企業間取引）専用で販売を開始する予定です。2026年にアメリカ市場での販売を予定しており、続いて2027年にはヨーロッパ市場での展開を予定しています。その他の二次的な市場についても現在検討中です」精密発酵という新しい技術で、食糧危機や医療課題を解決できる日が、すぐそこまで来ているのかもしれない。

※牛のゲップに含まれるメタンガスは温室効果ガスの一つで、CO₂の約25倍の温室効果があり、世界に数十億頭いる家畜から排出されるメタンガスが世界の温室効果ガス総排出量の5%を占めると言われている。



精密発酵を行うタンク。



精密発酵技術を研究する施設。



「パリの胃袋」から広がる、包装ゴミを減らすビジネス

PANDOBAC

<https://www.pandobac.com/>

レストラン経営者の悩みごとから始まった事業

フランスでは、特定の業界や場所に特化したスタートアップ支援も行われている。「パリの胃袋」と呼ばれるランジス卸売市場にも、持続的な循環型経済を実現するためにスタートアップを支援する仕組みがある。それを利用して、ゴミを減らすという身近にあり続ける課題の解決に取り組んできたスタートアップが、PANDOBACだ。「レストランの経営をしていた時、毎日大量の包装廃棄物が出ることに悩んでいました。ゴミが出るというだけでも大きな問題ですが、処分するには多くの経費もかかります。私以外にも同じように悩んでいる経営者はたくさんいましたが、誰も解決策を提供してくれませんでした。だから、自分でその解決策をつくろうと決意したんです」



ケースの追跡状況は、スマートフォンのアプリで確認できる。

そう語るのは、PANDOBACの創業者、Shu Zhang（シュ・ジャン）さんだ。PANDOBACは食品供給チェーンのすべての関係者、農家、協同組合、魚屋、屠殺場、食品加工工場、野菜販売業者、食品卸売業者、小売業者、商業施設、ケータリング業者、レストランなどに向けて、あらゆる製品に対応した再利用できる包装材を提供している。具体的には、再利用可能な輸送用ケースをレンタル式で貸し出し、回収・洗浄して何度でも使える状態にしているのだ。「2019年に創業した当初は1日200箱以下の取引でしたが、現在は1,000箱以上の取引があります。ランジス卸売市場からほかの地方にも顧客が広がり、毎年、新たなサービスメニュー作りにも取り組んでいます」とジャンさん。

徹底した衛生管理と柔軟なシステムづくり

PANDOBACの事業の特徴は、環境影響と衛生基準に徹底的にこだわった洗浄と、ケースのトレーサビリティだ。食品の包装材として、衛生面は妥協できない最優先事項だが、大量の水を使うため環境負荷も高い。そこで水使用量を節約できる洗浄機の開発に投資。さらに環境への影響を最小限に抑える洗浄液を使用し、濯ぎには殺菌効果の高い80度の熱湯を使用している。トレーサビリティについては、ケースに付与したQRコードなどを用いて各配送拠点間移動を追跡している。せっかくの再利用可能なケースでも紛失すればゴミになる。そうならないよう、独自の追跡ソールを開発し、いつでもへ移動したか、どこに保管しているかを完全に把握できるシステムを構築した。「私たちは果物・野菜から肉類、魚介類、乳製品、加工食品、パン類など幅広い食品の輸送用ケースを提供しています。

小さい会社だからこそ、フットワークが軽く、顧客の要望やプロジェクトに寄り添ったシステムを組むことができます」と、オペレーション・エンジニアのCindele DELEHEDD（サンデル・ドゥルエッド）さんは言う。一方で今後の課題について教えてくれたのは、広報ディレクターを務めるKarolina CIESLINSKA（カロリナ・シェスリンスカ）さんだ。「再使用を後押しする規制も進んでいますが、使い捨て業務用容器に今後導入される予定のエコ税は、多くの企業にとって大きな課題です。再使用可能な容器に切り替えれば、そのエコ税の対象外になるとはいえ、大企業は変化を好みません。持続可能な物流への移行をどうサポートするか、そこが鍵になります。新たな規制や環境的な要請を前に、近い将来、選択の余地はなくなるでしょう。私たちはこうした変化を注視し、最適なソリューションを提案していきます」この変化に対応するため、PANDOBACは洗浄センターの規模を5倍に拡大するとともに、大手企業とのパートナーシップ強化を進め、取扱量の増加と使い捨て容器に関する競争力向上を図っている。



ランジス卸売市場の一角にあるPANDOBACの拠点。



QRコードで管理されているケース。



オペレーションエンジニアのCindele DELEHEDDさん。



サステナブルシティを訪ねて

第10回

Bruxelles

ブリュッセル

時と光の交差点、グラン・プラス 世界一美しい広場から始まる旅

アムステルダムからユーロスターに乗って2時間、久しぶりにブリュッセルに立ち寄る。
EU本部があり、サステナビリティに関する国際機関も集まっているので、仕事では時折訪れるが、
やっぱりこの街の魅力は「ベルギービール」と「美食」、そしてグラン・プラスに代表される歴史と文化の饗宴だ。
明日、パリに戻るまでの3 / 4日のオフ。観光の王道の真髄に触れる。



ザ・ビュー(ラ・グラン・ルー Grande Roue Place Poelaert)と呼ばれるザ・ポラル広場にある観覧車。高さ55メートルを誇り、ブリュッセルで最も高い展望台の一つとして、街のパノラマビューを堪能できる。写真はキャビンから見下ろす旧市街。



丘陵地で高低差のある地形に築かれたため、坂や階段が多く、中世の歴史的な街並みが残っている。



石畳の先の115年目のクロワッサン

昨夜は到着が夜になり、地元の店でムール貝とフリットとLULU (ベルギーの生ビール) を飲んで寝てしまったので、始まりの朝食はブリュッセルならではの贅沢、あのヴィタメール本店のクロワッサンにする。ショコラティエとしてあまりにも有名なが、ヴィタメール本店はもともとブーランジェリーパティスリー。焼き立てのクロワッサンが驚くほどおいしい。セントラル駅の近くのホテルから、石畳の曲がりくねった道を10分ほど歩くと、馴染みのWのロゴマークが現れる。1910年創業、ベルギー王室御用達。日本でも有名すぎるほど有名なショコラブランド。店の前の舗道に張り出した品の良い赤色のテント屋根の下に、無造作に椅子が置かれている。以前来た時は、2階に日本の喫茶店に似たスペースがあり、ショコラはもちろん、朝食や昼食のメニューが楽しめ、いつも地元の人たちで賑わっていた。今は2階のカフェスペースはなくなってしまったが、テラス席でカフェとクロワッサンをいただくことができる。甘く、香ばしい、独特の食感。記憶どりのおいしさ。

バンオショコラのショコラはなにしろヴィタメールだ。店の前には、アンティークマーケットが開かれることで有名なグラン・サブロン広場。そこに流れる100年の時を眺めながら、変わらずに差す陽ざしと、そこに有り続ける営みの偉大さを噛みしめている。



ブリュッセルの朝に香る名物のクロワッサンとバンオショコラ。



格調高いオーダーメイドから、カジュアル、スポーツまで。多彩な靴屋が並んでいる。

坂道をくだり、観覧車から街を眺める

「ブリュッセル」という名は、古オランダ語で「沼地の集落」という語源からきているという。沼地の集落から、ベルギーの首都、欧州の政治・経済の中心にどうやってのぼりつめたのだろうか？ 中世の歴史と文化を紡ぐ旧市街に行く前に、王宮の丘に向かうことにする。歩いていて、ふと気づいたことがある。坂道が多いのだ。グラン・プラスを中心にコンパクトにまとまっている旧市街の周りは、だらだらとした坂が多い。所々、坂に面した中世の古い建物は1階が斜めに切られているような不思議なデザイン。坂の上側の部屋の中は一体どうなっているのだろう。そして、なぜか靴屋が多い。さっきから5分ほど歩いただけなのにもう4、5軒だ。欧州は靴を履き続ける文化があるし、ドイツやオランダは医療器具としても発展している。少し高くても、きちんとした良い靴を買い、直して履き続ける。そんな古き良きスタイルが生き残っているのかもしれない。マグリット美術館を横切り王宮を眺め、少しくだと芸術の丘。さらにぶらり歩いていると、途中で観覧車が回っている。と

ても空いていたので乗ってみると、旧市街を一望するガラス越しの絶景。見惚れていると、そのまま2周目に入る。大サービスだ。堪能した景色の中の旧市街へ。ゆっくりと流れる時間を見下ろしながら、坂道をくだる。

世界一美しい広場、 グラン・プラスの残光

旧市街の中心は、その美しさから『レ・ミゼラブル』のヴィクトル・ユゴーが「世界一豪華な広場」と呼んだグラン・プラスだ。春には2年に1度、あまりにも有名な花の絨毯「フラワーカーペット」もある。グラン・プラスはその歴史的価値と美しい景観から1998年に世界遺産に登録された。ただ、その歴史は美しいだけではない。1523年にはプロテスタントの最初の殉教者たちの処刑場になった。1695年の大同盟戦争時にはフランス軍の砲撃により破壊された。その時、市庁舎の塔の石造りの壁が放火による火災に耐えたので、広場を囲む家々は石造りで再建されることになる。市庁舎以外のほとんどの建物は、この時以降のものだ。

美しい景観は、過酷な歴史を経て生まれたのだ。

広場は、15世紀に建てられたゴシック様式の市庁舎を中心に、同業者組合の寄合場所だったギルドハウスに囲まれており、壁面に飾られた当時の職業を表す紋章や華麗な像が、商業都市としての繁栄を文化として紡ぎ出している。縦約110m×横約70mの石畳の広場は中世の香りに包まれ、世界中の観光客を惹きつける。今日も平日だが、とてつもなく賑わっている。そして、団体のツアーがとても多い。以前よりもかなり多い印象だ。イギリス、イタリア、スペイン、フランス、中国……。さまざまな国旗が、さまざまな国のツアー会社のロゴマークと一緒にコンダクターのパラソルの先で揺れている。少ないグループで5〜6人、多いところは数十人。たくさんの人が説明に聞き入っている。端っこでは、絵描きがパレットを広げている。並べられた絵に見入る人もいる。個人で、それぞれの価値を求める旅も良い。その街の歴史や文化の有り様を、伝えたい熱意を持った人の言葉で聞く旅もすばらしい。観光という名の旅の持つ力をグラン・プラスが、やさしく描き出しているような気がした。

光を観ること、旅をする理由

グラン・プラスに圧倒されていたら、とっくに昼を過ぎている。せっかくだから、観光らしいものを食べたい。ワッフルとブリュットだ。ワッフルは2種類ある。厚めのしっとりめの生地、楕円形のリエージュワッフル。さっくりした軽い口当たりが特徴で四角いブリュッセルワッフル。生地自体の甘さは控えめだが、フルーツやチョコレート、信じられないくらい山盛られたクリームがトッピングされる。18世紀のギリシャに起源があり、世界で最も古いお菓子の一つである小麦粉と卵を焼く『ウブリ』に凹凸模様をつけて焼き、それをゴーフルと呼ぶようになったものが始まりだとか。クレープもそうだけれど、世界中で皆、小麦粉を甘く焼き上げた菓子を好むことは変わらない。フリットもそうだ。世界中で芋は揚げられて、たくさんの人の幸せになる。そして、ブリュッセルのフリットは、マヨネーズでさらに幸せになる。

少し歩くと、黒山の人だかり。小便小僧だ。世界三大がっかりと言う人もいるが、違うと思う。こんなに多くの人に囲まれ、定期的に服を着替え、近くには衣装博物館まである。小便小僧の名誉にかけて言う。がっかりしない。しっかり挨拶をし、世界最古のアーケード商店街と呼ばれる「ギャルリ・サンチュベール」に足を伸ばす。ガラスと鉄の屋根に覆われた瀟洒なアーケード。1846〜1847年頃につくられたアールヌーボー式のデザインがエレガントだ。「女王」、「王」、「王子」の3つの通りがあり、チョコレートショップや雑貨屋からカフェ、映画館、いろいろな店が連なっている。ミニチュアのショップまである。そして、ここにもツアーがやってきた。小さな子どもたちのツアー。遠足だろうか。先生らしき人が熱心に説明している。子どもたちの興味はあちこちに飛んでいるけれど、たくさん観た光の中のいくつかが、彼らの心に残り、明日のための知となり、文化になる。だから、人には、旅が必要なのだ。たくさんの人が訪れる場所には、それだけの魅力があり、理由がある。そこに差す光、訪れた時だけに差す光を観ることが、旅に出る最大の理由かもしれない。



丸い形のリエージュワッフルと四角いブリュッセルワッフル。山盛りの生クリームとチョコレートをトッピング。



今日は青ずくめの小便小僧。世界最古のアーケート「ギャルリ・サンチュベール」を訪れた遠足の子どもたち。



Event information

日比野克彦

水戸芸術館
現代美術ギャラリー

2025年7月19日(土) — 10月5日(日)



日比野 克彦
1958年岐阜市生まれ。1984年東京藝術大学大学院美術研究科修士課程デザイン専攻修了。大学院在学中にダンボールを素材に制作した作品で注目を集め、1982年日本グラフィック展大賞受賞。国内外で多数の展覧会に出品するほか、舞台美術や芸術祭のプロデュースなど多岐にわたる分野で活動。近年は地域の参加者と地域の特性や関係性、人びとの個性を活かしたアートプロジェクトを数多く行う。現在、東京藝術大学長、岐阜県美術館館長、熊本市現代美術館館長、日本サッカー協会参与。



合作『えのほん』
1988年にミキハウスが企画制作した日比野氏による子ども向け絵本。子どもが自由に落書きすることで、日比野克彦と子どもの共同作品となる。本展覧会のために、読者から実際に落書きされた絵本を募集、16冊を展示している。



ひとり橋の上に立ってから、
だれかと舟で繰り出すまで

60年以上の活動の変遷を辿る、今までにない展覧会

日本の現代アートの第一人者であり、第11代東京藝術大学長を務める日比野克彦氏の、幼少期から現在へ至る活動の変遷を辿る展覧会が、水戸芸術館で開催されている。1980年代前半にダンボールを素材にした作品で注目され、2000年代以降は多くのアートプロジェクトを展開し、アートを地域や行政、企業などの社会と結びつけてきた日比野氏の活動を、170点以上の作品や、生誕から現在までの年譜などを通して多角的に知ることができる。本展覧会では、新潟県十日町市助平での「明後日朝顔プロジェクト」や岐阜県長良川の「こよみのよぶね」など地域とともに取り組むアートプロジェクトといった必ずしも形や物として残らない活動についても、日比野氏の振る舞いや関係者の言葉を掘り下げ、また関係者へのインタビューをもとに制作した絵本や漫画などを通して、展覧会の中で表現するという今までにない挑戦をしている。

拡張する芸術実践の先にあるもの

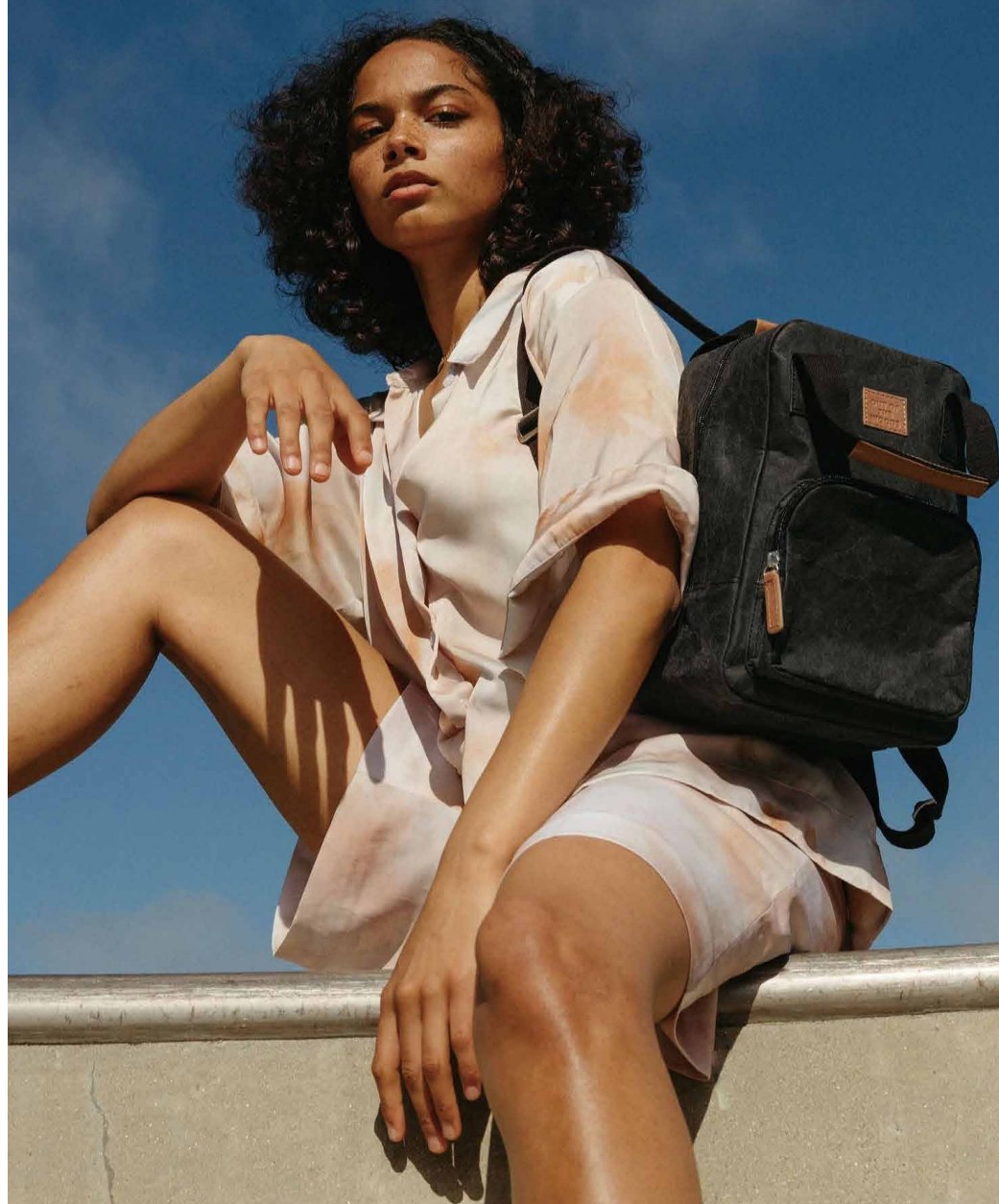
日比野氏は自身の作品やプロジェクトを振り返り、「ものは必ず朽ちていく、つくり終わったら安定して何も朽ちない、変わらないということはない。それをゼロに戻してまたつくり始める、輪廻・回転していく。そういう時間の経過を受け入れるのが『持続

性』であり、自分の作風とつながる部分があると思います」と語る。さらに今後の構想を尋ねると、年譜の最後に書かれていた『文化的処方』の文字を示してくれた。「この『文化的処方』というのは、アート活動と医療、福祉、テクノロジーを組み合わせるその人がその人らしくいられるレジリエントな場所や体験を創り出そうというものです。これにより個人の活動意欲や幸福感の増進、健康状態の回復などを図るとともに、社会の寛容性や包摂性の向上にも効果を与えようとしています。震災の後、ガスや水道や電気があっても孤独の中で亡くなってしまった人がいたように、コミュニティや文化は息を吸うのと同じくらいに必要なこと。ライフラインとしてのアートというもののは絶対にあります。近年、世界で増えつつある紛争についても、互いの違いを受け入れ合える文化というものがなくなっていくわけですね。紛争をなくし平和を実現するための文化・芸術というものも必要になる。だから、文化・芸術を経済や医療、福祉のベースとして位置付けていかなければならないと考えています」。60年にわたる活動を多角的に振り返りながら、社会のベースとして文化・芸術が果たす役割の大きさを垣間見る、そしてこの先の日比野氏の活動へのさらなる期待が募る。そんな本展覧会に、ぜひ足を運んで欲しい。



on the bridge
2002/2025
ワークショップ参加者および来場者の橋をテーマにした作品によるインスタレーション。

サステナブルを持ち歩こう。



海洋プラスチックごみを100%原料とするバッグ「OUT OF THE OCEAN®」と、責任を持って管理された森林の木材を原料とするウォッシュャブルペーパーのバッグ「OUT OF THE WOODS®」は、何気ないお出かけをちょっぴり特別にする、地球からの小さな贈り物。このバッグと一緒に、より良い未来を描くための小さな一歩を踏み出そう。



OUT OF THE OCEAN®

管理された森林で間伐した再生材の木質繊維を原料とし、使い古されたレザーに似た質感ながら、軽量で高い耐久性、何度でも洗うことが可能です。



OUT OF THE OCEAN®

海岸や沿岸地域から回収したプラスチックごみを100%原料としたエコバッグです。

Online Shop



OUT OF THE WOODS®



OUT OF THE WOODS®

<https://outofthewoods.jp/>